

1. はじめに

大乘仏教においては、「一切衆生の利益・安楽のため」ということが、しばしば強調される。小品系般若経も例外ではなく、他の衆生が自分や家族と同等・平等であることを謳い、「一切衆生のため」という思いをもつことが勧められる。しかし一方で、同経には、一見したところ「衆生」を低くみなすような記述も見られる。

本発表では、「衆生」に関して、一見異なる二つの見方が経典内に共存していることを、どのように理解したらよいかという点について、経典の記述を頼りに考察を深めていきたい。

2. 「衆生」とは何か

小品系般若経において「衆生」という言葉は特に定義されることなく、自明な言葉として用いられている。そのため、この経における「衆生」の意味するところを知るためには、この言葉の前後の説明を読み解いていく必要がある。「過去世に、諸仏世尊は無始無終の輪廻世界における衆生のために教えを説いた（荻原本 p.873）」と述べられていることから、「衆生」は輪廻世界のものとして捉えられていることが分かる。また、「動物のたぐいの衆生（荻原本 p.343）」、「動物や餓鬼に生まれた衆生（荻原本 p.766）」とあることから、人間のみならず、動物なども含む輪廻生存するすべての存在を指している言葉であることを窺い知ることもできる。

3. 「衆生」を平等視する記述

そのような衆生に対して、小品系般若経では「母と思ひ、父と思ひ、息子と思ひ、娘と思ひ（荻原本 p.117）」と述べられ、一切衆生を自分の近い者と同様に重要な存在だと思ふことが勧められている。さらに、「衆生は自分自身だと思ひを生じなければならぬ（荻原本 p.117）」と説かれており、一切衆生を自分と同様に思慮することが徹底して勧められていることが分かる。一切衆生を自分と同じように捉えることは、すなわち、一切衆生を平等に捉えることでもある。

4. 「衆生」を「菩薩摩訶薩」と比べて低くみなすような記述

一方、「菩薩摩訶薩」と比較して、修行が遅れている存在として「衆生」が描かれることもある。例えば、「菩薩摩訶薩は〔般若波羅蜜を〕行じているだけで、一切衆生を圧倒する（荻原本 p.829）」と説かれている。また、十善業道を具備している衆生の功德より、般若波羅蜜を聞き、書写する菩薩摩訶薩の功德の方が多いたことが説かれている（荻原本 pp.803-804 参照）。

5. 「衆生」のなかの「菩薩摩訶薩」

このように見ていくと「菩薩摩訶薩」と比べて「衆生」は低位のものであり、両者の間には断絶があるように思われるかもしれない。しかし、両者は断絶していない。というのも「菩薩摩訶薩」は「衆生」のなかに存在するものだからである。その傍証として、「菩薩 bodhisattva」「摩訶薩 mahāsattva」という言葉が「衆生 sattva」という言葉と深くかかわって形成されていることが挙げられる。さらに、「菩薩摩訶薩」が「衆生」のなかに存在することを示す例が経中に見られる。これらに言及しながら、「衆生」と「菩薩摩訶薩」は断絶したものではなく、連続したものであることを論じていく。